

# 絶観論の本文研究

柳 田 聖 山

## 第一部 解 説

### 一

敦煌出土の禅籍の主なもの、夙に矢吹慶輝氏の『鳴沙余韻』（昭和六年）、および『大正新修大藏経』の第八十五卷古逸部（昭和七年二月）その他に収録されたが、その後新らしく発見されたもので、もっとも重要なものは、『二入四行論』、『神会録』、『絶観論』の三種である。これらはいずれも、すでに故人となった鈴木大拙、胡適、久野芳隆氏等が、あるいは北京の京師図書館や、ロンドンの大英博物館、パリの国民図書館、および個人所有の敦煌資料の中より発見して、数種の写本を苦心校合し、漸く一般に紹介されたものである。しかし、さらにその後に至って、ロンドンの大英博物館の敦煌資料のすべてが、マイクロフィルムによって紹介されて全体の調査が進むとともに、パリと北京のものを含む綜合目録・商務印書館編の『敦煌遺書総目索引』の出版がこれに拍車をかけたこともあり、従来知られなかった写本の断片がつぎつぎに確認されて、前記三種の禅籍の本文にかなりの修正を必要とするに至った。事情は、すでに『大正新修大藏経』の古逸部に収録されたものについてもまったく同様であり、従来は散発

的に紹介された敦煌の禪籍を、今日としては全体的に総合し、統一的な立場から更めて検討する必要にせまられつつある。したがって、右に挙げた三種の初期禪宗の文献は、すべて発見者の非常な労苦にもかかわらず、出版部数が少ないこととともに、テキストそのものに対する再検討を要するところが少なくない。とくに、これらの文献はいずれもかなりの長篇であり、従来全く知られることのなかった初期禪思想の解明にとって極めて重要であるから、今日としては知られる限りのテキストを合せて、新しい本文を決定しておく必要があると思う。

今、『二入四行論』と『神会録』については、すでに他に計画があるので、ここでは右のような見地から『絶観論』の新しい校訂を試みたいと思う。

## 二

『絶観論』は、すでにその題名について多くの問題をもつが、まずテキストとして、今日までに知られているのは、つぎの六種である。

- 一、入理縁門一卷（積翠軒石井光雄氏旧蔵）
- 二、入理縁門一卷（ペリオ第二七三二号）
- 三、三藏法師菩提達摩絶観論（ペリオ第二〇四五号）
- 四、観行法為有縁無名上士集（北京本関字八四号）
- 五、絶観論（ペリオ第二〇七四号）

## 六、達摩和尚絶観論（ペリオ第二八八五号）

右のうち、最初に発見されたのは第四の『観行法為有縁無名上士集』で、はじめ陳垣氏の『敦煌劫余録』第八帙に著録され（民国二十八年）、鈴木大拙先生が昭和十年（一九三五）に出版された写真版『少室逸書』、およびその翌年出版の『校刊少室逸書』（いずれも安宅仏教文庫刊）ですでにそのテキストの全体が知られていたのであるが、当時は未だその内容的な解明に至らず、神会の弟子無名のものとみられるのみであった。ところが、その翌年の四月に、久野芳隆氏が、パリで第二の『入理縁門一卷』と、第五の『絶観論』、および第六の『達摩和尚絶観論』の三種を発見し、それらを合わせて一部の本文を決定し、他の資料『大乘五方便北宗』（ペリオ第二〇五八・二二七〇号）と共に書誌的な解説を加え、『宗教研究』新第十四の一号（昭和十二年一月）に、『流動性に富む唐代の禅宗典籍』の題下にその本文を発表したのが機となり、恰もこれと相い前後して、鈴木大拙先生が右の三種を別に新しく校合してテキストを決定し、『仏教研究』第一巻第一号（昭和十二年五月・六月号）に「敦煌出土達摩和尚絶観論につきて」を発表、先年の北京本『観行法為有縁無名上士集』がその異本であることを注意され、つづいて昭和十四年二月発行の『仏教研究』第三巻の六に、ふたたび久野芳隆氏が「牛頭法融に及ぼせる三論宗の影響——敦煌出土本を中心として——」を寄せて、ペリオ本三種を校合した新しいテキストを提供するとともに、とくにこれを牛頭法融の作であつて菩提達摩のものでないことを主張されたが、さらに、昭和二十年三月に至つて、鈴木大拙氏が愛弟子古田紹欽氏の協力の下に、第一の石井光雄氏所蔵のテキストの写真、およびこれを北京本に対校したテキストを弘文堂より出版して、あらためて達摩説を主張されたのが、この書の本文と作者問題についての成果のすべてであり、作者問題

を別とすれば、とにかくここに五種の写本が出揃ったのである。

ところが、右に掲げた第三の『三藏法師菩提達摩絶観論』は、従来まったく見落されていた一本で、筆者は前記の『敦煌遺書総目索引』によってその存在を知り、その後ペリのコレジュ・ド・フランス教授ドゥミエヴィル博士と友人柴田増実氏の好意で、他のすべてのテキストと共にその写真を手入することができたのであるが、この書は他のペリオ本三種に比して、題名・内容ともにさらに注目すべき点を含んでいるように思われる。

先に言うように、ロンドンのスタイン本はその写真のすべてが公開されて、学者の総合的な研究に役立つているが、ペリオ本と北京本は残念乍ら今なおその全貌を知ることができない。とくに、『絶観論』のテキストが、ほとんどこの二つの図書館に収蔵されていることは、今後さらに新しいテキストの発見を予想せしめるが、今は右の『三藏法師菩提達摩絶観論』の新しい出現を機として、すべてのテキストをあらためて原写真によって校合し、従来の研究の問題点をここに整理しておきたい。

### 三

いったい、『絶観論』に対する従来の研究は、概してその作者問題に傾き、テキストそのものおよび思想内容の検討については意欲的な成果をみない。そうした傾向は、他の敦煌出土の禅籍のすべてに共通するが、『絶観論』の場合はとくにそれが甚しい。すなわち、先に発見されたペリオ第一八八五号写本は、その巻首を欠くが、末尾に「達摩和尚絶観論」とあることから、鈴木先生がこれを菩提達摩のものとされたのに対し、久野芳隆氏は前記の「牛

頭法融に及ぼせる三論宗の影響」と題する論文で、『宗鏡錄』第九十八に牛頭法融の『絶観論』からの引用があること、および敦煌出土の『絶観論』の首部に近い部分が、『祖堂集』第三の牛頭和尚の章にかなり多量に引かれていることから、これを牛頭法融その人の作品と断じたのであり、この説が戦中(昭和十五年)における関口真大氏の『絶観論撰考』(大正大学学報三〇・三一号)を出発点として、戦後にさらにいっそう継承強化され、『宗鏡錄』の第九十八巻以外のものと『万善同帰集』に含まれる他の多くの引用、および圭峰宗密の『円覚經大疏鈔』第十一上に、牛頭法融の『絶観論』という作品があったという文証によって、敦煌出土の『絶観論』は牛頭法融その人の作と決せられることとなった(昭和三十二年『達摩大師の研究』)。しかし、かりに右の説によって、『絶観論』が、もともと牛頭法融の作であったにしても、これがどうして『達摩和尚絶観論』とよばれるに至ったのか、また敦煌出土『絶観論』のいずれのテキストにも、牛頭法融の名のないのは何故か、また『絶観論』という書の内容を伝えるもつとも早い時代の証拠である伝教大師の『台州録』に、必ずしも牛頭の作品と明記せぬことや、かれが貞元二十年の十月十三日に天台山禅林寺の僧僚然より伝えたという「達磨付法牛頭法門」との関係など、問題はさらに残るであろう。この間に、東北薬大の中川孝氏によってあらためて提起された菩提達摩説(『絶観論考』印度学仏教学研究第七の二)などもやはり検討の余地があると思われる。

いずれにしても、敦煌出土本『絶観論』の作者問題は、今日のところ、すべてが仮説の域を出でない。それはさらに、敦煌文書全体の中に占める禅籍の位置づけや資料価値の問題ともつながって、テキストそのものに明記のない牛頭説を決するには、中国本土に残された伝統資料と敦煌文書との内面的関係を明らかにする必要がある、さらに

敦煌以外の『絶観論』関係の資料についても、多くの問題が残っている。たとえば、すでに筆者が指摘したように、宋初の延寿が編した『宗鏡錄』第九十八卷に引かれる「牛頭法融絶観論」は、同じ編者の『心賦注』に引くものと比較することによって、共通する部分と共通しない部分とに二分され、『心賦注』のみにあって『宗鏡錄』にない部分が、じつは敦煌本『絶観論』に共通する事実も知られるから、延寿の時代には同じく牛頭の『絶観論』と呼ばれ乍ら、テキストそのものに異同のあったことが推定される（拙稿『初期禅宗史書の研究』一四七ページ）。したがって、敦煌本『絶観論』の研究としては、牛頭法融に帰せられる『絶観論』の研究と並行しつつ、敦煌本そのものの本文研究と、新古の各種異本の比較による発展事情の考察が前提となると思われる。

#### 四

今、右のような意図の下に、現在知られる六種のテキストを比較すると、結果的に自から三種の発達段階が考えられる。すなわち、第一の石井本およびペリオ第二七三二号は、いずれもはじめに『入理縁門一卷』と題し、つぎのような注記をもつ点で共通し、これを第一段階のものと見てよいのでないか。

入理縁門一卷 廬是問頭縁門起決 注是答語入理除疑 是名絶観論

言うまでもなく、『絶観論』は、入理先生と弟子縁門の問答の形で展開されるのであり、そのことはこれにつづく序文のところで明記されるが、この写本はそのことをまず題名の下に注記して、形式の上で明示しようとするのであり、他の四種の写本と異っている。もっとも、ペリオ第二七三二号は、縁門起決以下の十二字の部分が破れて

いる上に、最後の論の一字を欠いて、ただちに大道沖虚以下の序文につづくが、この写本と石井本は、その体裁・内容ともにまったく同じ系統の古層に属する。すなわち、縁門の質問を太字で写した下に、入理の答語を細字で二行に分ち書きする形式が、完全に同一である上に（ただしこの形式は最後のところで多少くずれる）、縁門の質問するテーマが改まる毎に、あらためて縁門問曰と書いて、同じテーマの往復の場合と区別し、約十五項のテーマについての問答を重ねて終り、最後に入理先生が縁門に言った言葉として、

夫至理幽微、無有文字、汝向來所問、皆是量起心生、夢謂多端、覺已無物。汝欲流通於世、寄問仮名、請若取蹤。故名絶観論也。

#### 縁門論一卷。

と記して全体を結んでいて、もともとこの書が外形的に『入理縁門』もしくは『縁門論』とよばれ、内容的に『絶観論』とよばれたことを示している。

今まですでに、『絶観論』について発言したすべての学者が一致して指摘するように、この書は以上で首尾一貫するのであり、他の写本がさらにこの後に約十三条の問答を録しているのは、おそらく本来の形ではあるまい。もっとも、右の石井本およびペリオ二七三二号が、本来の形を示すと言っても、それは現在知られている六種の写本の中での相対的な意味で言うのであり、決定的なものでないことは言うまでもない。たとえば、縁門の質問を大きく、入理の答語を小さく書く様式と、そのことを説明する巻首の注記が、果して本来のものかどうか、やはり問題が残るように思われる。こうした様式の新古については、さらにすべての敦煌資料、もしくは広く古文書一般の巾

広い知識が必要となる。ついでに言えば、ペリオ第二七三二号の末尾には、貞元甲戌の年号と、甘州大寧寺で落藩僧懷生が校訂したというコロホンのあることを、鈴木大拙先生が報ぜられてから、すべての学者が不用意にこれを信じているが、今手許に揃っている写真による限り、このことはすこぶる確かでない。おそらくは、他の資料のコロホンであろう。

いずれにしても、『入理縁門一卷』、又の名を『縁門論』もしくは『絶観論』とよぶ作品は、石井本とペリオ第二七三二号がもっとも古い形をとどめていると思われるが、この本の特色はさらにどこにも菩提達摩の名をあらわさない点にある。今日、菩提達摩の真説として唯一のものとされる『二入四行論』もまた必ずしもその本文に達摩の名を示さず、三蔵法師、又は法師の名が二ヶ所に見えるにとどまるから、『入理縁門一卷』もまたその名をあらわさぬことを、とくに異とするに足りぬ。むしろ、宗密や延寿の言うところに従って、その作者を牛頭法融と認めて差支えないかも知れぬ。

元来、絶観という言葉は、すでに久野芳隆氏が指示されるように、牛頭法融のものとされる『心銘』に見られるし、三論宗の大成者吉蔵が『大乘玄論』の二智義の条に般若波羅蜜の深義を明して、

夫万化非無宗、而宗之者無相。虚宗非無契、而契之者無心。故聖人以無心之妙慧契彼無相之虚宗。即内外並冥、  
縁智俱寂。智慧是知照之名、豈能称絶観般若。(T. 45—50a)

と言ひ、般若の本質そのものを絶観とし、智慧はなお観を立場とすることを明らかにしているのと関係し、無得正観を宗とした三論宗より出て、無相の虚宗に冥契することを主張した牛頭法融に、『絶観論』の作品があったこと



はむしろ当然と言ってよい。しかし、ここでさらに注目すべきは敦煌本『絶観論』の本来の名は『入理縁門論』であり、それが『絶観論』とよばれるのは、あくまで二次的なものであることである。すなわち、牛頭法融に絶観の思想があったことは確実としても、敦煌文書による限り、『入理縁門論』をこの名で呼ぶのは、やはり本来のものでないことに注目しなければならない。むしろ、この書がやがて『三藏法師菩提達摩絶観論』とよばれるようになるのを見ると、そうしたよび方にふさわしい内容を、本来この書がもっていたことを忘れてはなるまい。すなわち、入理と縁門という師弟の名は、あきらかに三藏法師菩提達摩の『二入四行論』を前提するもので、かりに『入理縁門』の作者が牛頭法融であったとしても、法融はすでに達摩の『二入四行論』の意を承けて、この書を作ったと考えなければならぬであろう。言うならば、菩提達摩の『二入四行論』によって、達摩以後の伝統を主張するために作られた浄覧の『楞伽師資記』が、『楞伽經』の訳者としての求那跋陀羅を達摩の先輩とするために、達摩の『二入四行論』によって求那跋陀羅の思想を示したように、『入理縁門論』は何らかの形で『二入四行論』を前提しているように思われる。

## 五

それでは、その本来の作者が何人であったにしても、『入理縁門』の一書が、あらためて三藏法師菩提達摩の『絶観論』となったのは何故か。その間の過程について考えてみよう。この名は、すでに注意したように、新しく発見されたベリオ第二〇四五号の巻首のそれによるのであるが、この写本の内容は巻首を欠く北京本『観行法為有縁無

名上士集』に完全に一致し、尾題もまた同じであるから、北京本の巻首もまたこの写本と同じであったことが推定される。しかも、『三藏法師菩提達摩絶観論』を『入理縁門』に比べると、すでに指摘されているように、その末尾に十三段ばかりの増加部分がある上に、両者に共通する本文全体において、かなりの文字の異同出入があり、そのために場合によっては内容の変化すら見られる。また、縁門の質問と入理の答語を、大小に分けて書く様式は、この書では完全に無視され、さらに縁門の質問をテーマ毎に新しい提起として起すこともなく、全体が同列の問答の継続として、一つの延べ書になっている。

結論的に言って、『三藏法師菩提達摩絶観論』は、『入理縁門論』の副題であった『絶観論』を標題とし、これに三藏法師菩提達摩の名を冠すると共に、さらに末尾に十三項あまりの問答を加えて、新たに『観行法』という尾題をあたえることにより、これを達摩禅の綱要書の如くに改作したのである。もっとも、『観行法』というのは新しく加わった末尾の十三項あまりの問答を指すとも考えられ、さらに従来その編者とみられていた無名上士集という五字も、よく考えてみると、有縁の無名上士のために集められた観行法の意にとるべきで、必ずしも編者の名ではあるまいし、まして特定の人名ではないと思われる。かりに無名を特定の人名もしくは逸名であるとしても、編者が自から無名上士と書くかどうか。他に例証のない限り、無名上士はこの書が予想する読者であって編者ではない。いずれにしても、『観行法為有縁無名上士集』は、『入理縁門論』が『三藏法師菩提達摩絶観論』となったときに新しく加えられた名であり、すでに菩提達摩の流れに属するかなり多数の観行者を対象とする、観行の綱要書となっていたことを思わせる。

先に言うように、『入理縁門』も『観行法』も、『絶観論』と総称されるすべての文書は、今日のところ敦煌資料以外には見出せないものであるから、右のような変化はあるいは敦煌においてのことで、中国本土の禅宗と何らかかわりがないとも言えるが、このこともまた他に例証のない限り俄かに断定はできない。むしろ、絶観と観行は、もともと反対の概念であることに注意したい。たとえば、宗密の『円覚経略疏』巻上の第一に、宗趣の通別を明らかにして、つぎのように言っているのが参考されてよい。

宗趣通別者、通論仏教、因縁為宗。別明此経、又有総別。総以心境空寂、覺性円満、凡聖平等為宗、令修行者忘情等仏、観行速成為趣。又以前趣為宗、令惑業消滅、永絶輪廻、起大神用、安樂自在為趣。別者有五対、一教義対、教説為宗、義意為趣。二理事対、理事為宗、顯理為趣。三境行対、理境為宗、観行為趣。四行寂対、観行為宗、絶観為趣。五寂用対、絶観心寂為宗、起大神用為趣。此五亦是従前起後、漸漸相由矣。

宗密によると、まず観行は方法（宗）であり、絶観はその目標（趣）であるが、さらに進んで絶観を方法とし、大神用を起すことを目標とするのであり、前者によって後者を起し、次第に深化してゆくわけである。

言うならば、観行と絶観は、矛盾しつつ次第に深まり、終いには覺性円満し凡聖平等のところに至り、安樂自在を得るのである。このような観行と絶観の弁証法的深まりは、必ずしも現存の『絶観論』の中に明確に表われているとは言えないが、そうした方向性があることは疑えない。とくに、後尾に附加された十三段の部に、如来藏の意が強くみられ、そうした傾向があることは確かであり、『絶観論』本文の般若的な傾向の部分と異なったところがあり、その故にとくに『観行法』とよばれたものではあるまいか。

つぎに、ペリオ第二〇七四号は、巻首に『絶観論』と題し、その下に「菩薩心境相融一合論」の名を有し、ただちに本文に入る点は『三藏法師菩提達摩絶観論』と同じであるが、本文は『入理縁門論』に近く、テーマの変る毎に縁門が起って質問したことを明記する点も一致する。残念乍らこの写本は、『入理縁門論』の第十二段に当る最後の問のところで終っている。写本の様式は、明らかに摺筆であって断欠でないが、質問のみで答えがないところを見ると、何かの事情で書写を中止したのであって、かかるテキストがあったわけではない。幸いにこのテキストは、ペリオ第二八八五号の相当部分に一致し、後者の首部に断欠のあるのを補い、前者が写さなかった後半部を、後者によって推定しうる便宜を有する。したがって、この二つの写本を同じ系統のものとすれば、首題を『縁門論』、別に名づけて『菩薩心境相融一合論』と言った筈で、この首題は石井本とペリオ第二七三二号のそれに一致し、尾題のみを『達摩和尚絶観論』と言ったのは、『三藏法師菩提達摩絶観論』の影響をとどめたことが判る。ただし、このテキストの最後のところは、『三藏法師菩提達摩絶観論』のそれに比して、さらに四種あまりの問答が加えられて、もっとも後に発展したことを示し、また『菩薩心境相融一合論』という首題も他に例がなく、おそらくこの写本のみが内容によって新しく加えたもののようである。

いったい、ペリオ第二八八五号は夙に注目されているように、大蕃国大德三藏法師法成の筆で、かれがこの本を書写した辛巳年は、八〇一および八六一の中、おそらく前者のようであるから、まさしく唐の貞元十七年に当り、

法成の青年期の筆である。これは、後年におけるかれの多方面な活躍のうち、禪への関心が比較的早く終止したことを推せしめるが、あたかも中原では『宝林伝』の成立と前後して、達摩系の禪のオーソドックスの問題が人々の関心を集めて、南北二宗の対立より、次第に馬祖系の興隆期に移る頃である。法成の写本が、『達摩和尚絶観論』という名を尾題にしつつ、首題を『縁門論』もしくは『菩薩心境相融一合論』と言ったとすれば、それは先に言うように法成の禪宗に対する関心——延いては敦煌仏教のそれを示すものであり、達摩系の禪宗という名よりも、その菩薩心境相融という思想内容が問題になっていたことが判る。かりに、先に引いた宗密の言葉に従うならば、心境空寂、覚性円満、凡聖平等を宗とし、修行者をして情を忘れて仏と等しからしめ、観行の速かに成ずることを趣とするのであり、いずれかと言えば、この書の全体を観行の書とみたのである。

近時、上山大峻氏が「楞伽師資記のチベット訳について」（竜谷大学仏教学会編・『仏教文献の研究』昭和四十三年）で指摘されているように、『楞伽師資記』をはじめとして初期禪録のチベット訳が、他にもかなり存することを考慮に入れるならば、或いは『絶観論』のさまざまな別名や首題は、敦煌で附せられたものかも知れず、さらにかつて諏訪義讓氏が「于闐国懸記漢訳攷」（支那仏教史学一の四）で論じられ、近時上山大峻氏の「大蕃国大德三藏法師沙門法成の研究」（東方学報第三十八・九号）で、徹底的な究明を見た法成の敦煌における活躍の実態をも含めて、詳細を今後の調査にまつ外はあるまい。

いずれにしても、首題を『菩薩心境相融一合論』とするペリオ第二〇七四号と、尾題を『達摩和尚絶観論』とするペリオ第二八八五号は、六種の『絶観論』のうち、敦煌文献の特色をもっとも濃厚に示すものであり、今後にお

ける敦煌資料の全体的な調査によって、その性質が究明されるべきであり、従来ほとんど後者のテキストの尾題のみによって『達摩和尚絶観論』とよばれ、あるいはその作者問題が論じられて来たのは、甚だ片寄った見方と言わねばなるまい。

以上によって、現在知られる六種の『絶観論』のそれぞれに異った題名の由来と、その前後関係について、一往の推定を加えたつもりである。しかし、はじめに断ったように、今後バリと北京の敦煌資料の全貌が明らかになるとき、あるいは大いに考え直さねばならぬと思われる。したがって、今は六種のテキストを右の結論に従って系統別に三種に分ち、各系統毎に本文の校訂を加えたものを、つぎに収録しておくことにしよう。

対校に当っては、上段に石井本(記号を①で示す)を底本として、これにペリオ第二七三二号(②で示す)を対校し、中段にペリオ第二〇七四号(③で示す)を底本として、これと重なる部分についてペリオ第二八八五号(④で示す)を対校し、前者にない後半部は自然後者を底本とすることとし、下段には新発見のペリオ第二〇四五号(⑤で示す)を底本として、北京本(⑥で示す)を対校し、さらに上段の石井本の分段に従って、上中下それぞれを対照できるように注意した。ただし、いずれも本文はそれぞれの底本のままとして、誤脱その他の校勘を加えなかったのは、一には時間的な余裕を得なかったためであるが、一には従来の先学の校訂が、あまりに私意による訂正を加えることに過ぎて、原本の形を変じた嫌いがあるのを考慮したためである。これらの三種の系統のテキストを綜合して、あたらしい定本を作る仕事は、いずれ他日にゆずりたい。

## 第二部 本文対校

入理縁門一卷

龜<sup>(1)</sup>是問頭、縁門<sup>(2)</sup>起決。注是答語、

入理除疑。

是名絶観論。<sup>(3)</sup>

(1) 龜以下、原写本では細字二行の

注の形式をとっているが、此の

校本では、一字を下げて示す。

又、本文中の入理の答語もすべて細字としない。

(2) 縁、以下十二字、[2]は破損。

(3) 論、[2]になし。

〔一〕

一、夫大道冲虚、幽微寂寞、不可以心<sup>(1)</sup>

会、不可以言詮。今且立二人、共<sup>(4)</sup>

談真実。師主名入理、弟子号縁門。<sup>(7)</sup>

絶観論の本文研究（柳田）

絶観論

菩薩心境相融一合論

三藏法師菩提達摩絶観論

□□□□□、幽微寂寞、不可以心

会、不可以言詮。今直仮立二人、

共談□□、□□□□、□□□□門。

夫大道冲虚、幽微寂寞、不可以心

会、不可以言詮。今且仮立二人、

共談真一。師名入理、弟子号曰縁

於是入理先生、寂無言說也。緣門忽起<sup>(8)</sup>、問入理先生曰、云何名心、云何安心。答曰、汝不須立心、亦不須強安。可謂安矣。

二、問曰、若無有心、云何學道。答曰、道非心念、何生於心也。

三、問曰、若非心念、當何以念<sup>(9)</sup>。答曰、有念即有心、有心即乖道。無念即無心、無心即真道。

四、問曰、一切衆生實有心不。答曰、若衆生實有心、即顛倒。只為於無心中而立心、乃生妄想<sup>(10)</sup>。

五、問曰、無心有何物。答、無心即無物、無物即天真、天真即大道。

六、問曰、衆生妄想、云何得滅。答、若見妄想、及見滅者、不離妄想。

於是入理先生寂無言說。時乃緣門忽起□□先曰、云何名心、云何安心。入理答曰、汝不須立心、亦不須強安、可□□矣。

又問曰、若有心<sup>(11)</sup>、云何學道。答曰、悲念、何在於心。又問曰、若非心念當何念。答曰、有念即有心、有心即乖道。無念即無心、無心即真道。

又問曰、一切衆生實有心不。答曰、若一切衆生實有心者、即無顛倒。弓為於無心中而立心故、乃生妄想<sup>(12)</sup>。

又問曰、無心有何物。答曰、無心即無物、無物即天真、天真即大道。

又問曰、衆生安相云何可滅。答曰、若見妄相及可滅者、皆不離妄相。

門。於是入理先生寂然無說。時乃緣門忽起、請問先生曰、云何名心、云何安心。入理答曰、汝不莫須立心、亦不須強安。

又問、若無有心、云何學道。答、道非心會、何在於心。

又問、若非心、當以何會。答、有會即有心、有心即乖道。無會即無心、無心即真道。

又問、一切衆生實有心不。答、一切衆生實無心、只為於無心法中而強立心、乃生妄相。

又問、無心有何物。答、無心即無物、即非法、非法即真道矣。

又問、衆生妄想、云何可滅。答、若見有妄可滅者、皆不離妄想。



七、問曰、不遣滅者、得合道理否。答

曰、若言合与不合、亦不離妄想。

八、問曰、若為時是。答曰、不為時是。

(1) 大、2になし。

(2) 微、以下三字、2は破損。

(3) 心、2による、1になし。

(4) 今の下に2は者あり。

(5) 且の下の2は仮あり。

(6) 主、2になし。

(7) 号の下の2は曰あり。

(8) 忽、2による、1になし。

(9) 念、1は確かならず、次の問答  
によって念とする、ただし、2  
は以下すべて会。×にて示す。

(10) 何以、2は以何。

(11) 心、2は確かならず。

(12) 心の下の2は者あり。

(13) 為、1は確かならず。

(14) 心、2になし。

(15) 生、2は是。

(16) 想、2は確かならず、また下に

又問曰、不道者合道理不。答曰、

若言合与不合、亦不離妄想。

又問、若為時是。答曰、一不為時  
是。

又問、若為時是。答、一不為時是。

也あり。

(17) 答の下に②は曰あり。以下すべ  
て×にて示す。

(18) 無、②になし。

(19) 物、②は確かならず。

(20) 曰の下に、②は無心有何物曰の  
七字ありて消却す。

## (二)

一、緣門問曰、夫言聖人者、当断何法、  
当得何法、而云聖也。入理曰、一  
法不断、一法不得、即為聖也。

二、問曰、若不断不得<sup>(1)</sup>、与凡何異。答  
曰、不同。何以故、一切凡夫妄有

所断、妄有所得<sup>(3)</sup>。

三、問曰、今言凡有所得、聖無所得。

然得与不得、有何異。答曰<sup>(4)</sup>、凡有

所得、即有虚妄。聖有所得<sup>(5)</sup>、即無  
虚妄。即論同与不同、無虚妄故、

於是緣門復起問曰、夫言聖人者、  
当斯何法<sup>(断)</sup>、当得何法而云聖也。答  
曰、一法不断、一法不得、此謂聖  
人。

又問曰、若不断不得者、与凡何異。

答曰、不同。何以故、一切凡夫妄  
有所断、妄有所得故。

又問曰、今言凡有所得、聖無所得。

然得与不得有何異。答曰<sup>(1)</sup>、凡有所  
得、即有虚妄、聖無所得<sup>(2)</sup>、即無虚<sup>(3)</sup>

又問、夫言聖人者、当断何法、当  
得何法而云聖人。答、一切法不断、  
一切法不常、一切法不得、此謂聖  
人。

又問、若不断不常不得者、与凡何

異。答、不同。何以故、一切凡夫  
皆妄想有所断、妄想有所得。

又問、今凡有所得。然得与不得有

何異。答、凡有所得、即有虚妄。  
聖無所得、即無虚妄。有虚妄者、

即無異無非異。<sup>(6)</sup><sup>(7)</sup><sup>(8)</sup>

四、問曰、若無異、聖名何立。答曰、

凡夫之与<sup>(9)</sup>聖人、二俱是名。名中道無二、即無差別、如說龜毛兔角。<sup>(10)</sup>

五、問曰、若聖人同龜毛兔角者、應是畢竟無、令人学何物。答曰、我說

龜毛無、不說龜亦無。汝何以設此難也。

六、問曰、無毛喻何物、龜喻何物。答

曰、龜喻於道、毛喻於我。故聖人無我而有道。但彼凡夫、而有我有名者、如橫執有龜毛兔角也。

七、問曰、若此者、道應是有、我應是

無。若有有無、豈非有無之見。答曰、道非是有、我非是無。何以故、龜非先無今有、故言有無、毛非先

妄。有虛妄者、即無同与不同。無

虛妄者、即無異与非異。<sup>(5)</sup>

又問曰、若無異者、聖名何云。答曰、凡之与<sup>(8)</sup>聖二俱是名、名中無二

即無差別、如說龜毛兔角也。

又問曰、若聖人同龜毛者、即應是畢竟無、令人学何物。答曰、我說龜毛無、不說龜無。汝何以誤此難。

又問、無毛喻何也。答曰、龜喻於

道、毛喻於我。故聖人無我而道也。俱彼凡夫而有我有名者、如橫執有龜毛兔角也。

又問曰、若如此者、道應是有、我

應是無。若有有無、豈非有有無之見。答曰、道非是有、我非是無。何以故、龜非先無今故有、不可言

即言同与不同。無虛妄者、即無異

与不異。

又問、若無異者、聖名云何立。答、凡之与<sup>(8)</sup>聖、二俱是名。名中無二、無二即無差別、如說龜毛兔角也。

又問、若人同龜毛者、即是畢竟無人、遣学何物。答、我說龜無毛、不說無龜。

又問、無毛喻何物、有龜喻何物。

答、龜喻於道、毛喻於我。是故聖人無我而得道成。

又問、若此者、道應是有、我應是

無、取立有無、豈非二見耶。答、道非是有、我非是無。何以故、龜非先無今有、故不可言有。我非先有今無、故不可言無。

有今無。故不言無。道之与我、譬類可知。

八、問曰、夫求道者、為一人得耶、為

衆人得耶、為各各得耶、為惣共有之、為本來有之、為伏修成得之。

答曰、皆不如汝所說。何以故、若

一人得者、道即不遍、若衆人得者、道即有窮。若各各得者、道即有數。

若惣共得者、方便即空。若本來有者、万法虛設。若修成得者、造罪

非真。

九、問曰、究竟云何。答曰、離一切根

量、分別貪欲。

(1) 断、(2) 得、(2) は上下す。

(3) 有、(2) は無。

(4) 答曰、(2) は誤って消除している。

(5) 有、(1)(2) ともに有であるが、正

有。毛非先有今無、故不可言無。道之与我譬類可知。

又問曰、夫道者一人得之、為衆人

得之、為各各有之、為惣共有之、為本來有之、為脩成有之。答曰、

皆不如汝所說。何以故、若一人得

者、道即不遍、若有衆人得者、道即有窮。若各各得者、道即有數。

若惣共有者、方便即空。若本來有者、万行虛設。若脩成得者、造作

非真。

又問曰、究竟云何。答曰、離一切

限量分別。

(1) 聖無所以下、(4) は断続しつっこより残存す。

(2) 得、(4) は破損して不明。

(3) 虚、(4) は破損して不明。

又問、夫道者為当一人得之、為当

衆人得之、為当各自有之、為当惣共有之、為当本來有之、為当從修

成也。答、皆不如汝所說。何以故、

若一人得者、道即不遍、若衆人得者、道即有窮。若各有者、道即有

數。若惣共有者、方便即空。若本來有者、万行虛設。若修成者、造

作非真。

又問、究竟云何。答、離一切限量

分別。

(1) 為当以下六字、原本はくりかえす。

しくは無とすべし。

(6) 無、[2]は妄。

(7) 非、[2]は虚。

(8) 異の下に、[2]は也あり。

(9) 与、[2]は問。

(10) 角の下に、[2]は也あり。

(11) 答以下三〇字、[2]になし。

(12) 我、[2]になし。

(13) 有、[2]になし。

(14) 求、[2]になし。

(15) 伏、兩本ともに伏であるが、お

そらく復の誤。

(16) 人、[2]は生。

(17) 道、[2]になし。[1]も確かならず。

(18) 設、[2]は説。

(19) 罪、[2]は作。

この段、はじめの六問答を『祖  
堂集』第三の牛頭和尚の章に引き、  
第八問答を『宗鏡錄』第九に引く。  
又、後者の最後の部分は、『万善  
同歸集』巻中にも引かれる。

(4) 無、[4]は言。

(5) 与非異、[4]は破損して不明。

(6) 曰、[4]になし、以下同じ×。

(7) 何云、[4]は云何立。

(8) 是名以下七字、[4]は破損して不  
明。

(9) 聖人、[4]になし。

(10) 龜毛者以下七字、[4]は破損して  
不明。

(11) 令、[4]になし。

(12) 人の下に[4]は遣あり。

(13) 不説以下十二字、[4]は破損して  
不明。

(14) 無毛喻何也、[4]は龜喻何物。

(15) 於道、[4]になし。

(16) 喻於我以下十四字、[4]は破損し  
て不明。

(17) 名者如、[4]は破損して不明。

(18) 有龜毛以下十六字、[4]は破損し  
て不明。

(19) 有、[4]になし。

(20) 之、[4]は二。

〔三〕

一、緣門問曰、凡夫有身、亦見聞覺知。  
聖人有身、亦見聞覺知。中有何異。<sup>(1)</sup>  
答曰、凡夫眼見耳聞、身覺意知。  
聖人即不爾。<sup>(2)</sup>見非眼見、乃至智非  
意知。何以故、過根量故也。

於是緣門復起問曰、凡夫有身亦有  
見聞覺知、聖人有身亦有見聞覺  
知、中有何異也。<sup>(1)</sup>答曰、凡夫眼耳  
聞身覺意知、聖人即不是。<sup>(4)</sup>見非眼  
見乃至意知。<sup>(5)</sup>何以故、過限量故。<sup>(6)(7)</sup>

又問、凡夫見聞覺知、聖人亦見聞  
覺知、有何異也。答、凡夫眼見耳  
聞、身覺意知。聖人不耳聞、非眼  
見、乃至非意知。何以故、過一切  
限量故。

- 21) 見の下に、[4]は耶あり。  
22) 故、[4]になし。  
23) 故、[4]になし。  
24) 譬、[4]は如。  
25) 又、[4]になし、以下同じ、×。  
26) 者の下に、[4]は為あり。  
27) 為各各有之、[4]になし。  
28) 有、[4]は得。  
29) 所説、[4]は破損して不明。  
30) 若一人得者、[4]は破損して不明。  
31) 有、[4]になし。  
32) 若各各以下十一字、[4]は破れて不明。  
33) 脩、者、造、[4]は破れて不明。

二、問曰、何故經中、復說聖人無見聞  
覺知者何。答曰、聖人無凡夫見聞  
覺知、非無聖境界。非有無所撰、  
離分別故也。

三、問曰、凡夫實有凡境界耶。答曰、  
實無妄有、本來寂滅。但被虛妄計  
著、即生顛倒也。<sup>(4)</sup>

四、問曰、我不解、若為聖見非眼見、  
聖知非意知。答曰、法體難見、譬  
況可知。如彼玄光鑒物、如照所照、  
非有能之眼。又如陰陽候物、似知、  
非有能知之意也。<sup>x</sup>

又問曰、何故經中復說聖人無見聞  
覺知者何也。答曰、聖人無凡夫見  
聞覺知、非無聖境。聖境界非有無  
所撰、離分別也。<sup>(8)</sup>

又問曰、凡夫實有凡境界耶。答曰、  
實無妄有、本來寂滅、但虛妄計著、  
生於顛倒。<sup>(9)</sup>

又問曰、我不解、若為聖見非眼見、  
聖知非意知。答曰、法體難見、譬  
況可知。如彼玄光鑒物、如照所照、  
非有能照之眼。又如陰陽候物、似  
知所知、非有能知之意。<sup>(10)</sup>

又問、何故經中復說、聖人無見聞  
覺知等、何意。答、聖人無凡夫見  
聞覺知、非無聖境界者、離分別兩  
又問、有凡夫境界耶。答、本來實  
無、但虛妄計著、生顛倒。

又問、為聖見非眼見、聖知非意知。  
答、法體難見、譬類可知、如彼玄  
光鑒物、非有能照之照。陰陽候物、  
非有能知之意。

- (1) 有、<sup>(2)</sup>は在。  
(2) 見非の二字、<sup>(1)</sup>は確かならず、  
<sup>(2)</sup>は見なし。  
(3) 凡、<sup>(2)</sup>になし。  
(4) 也、<sup>(2)</sup>になし、以下答語の末の

- (1) 也、<sup>(4)</sup>になし。  
(2) 曰、<sup>(4)</sup>になし。以下同じ、×。  
(3) 眼の下に、<sup>(4)</sup>は見あり。  
(4) 是、<sup>(4)</sup>は示。  
(5) 至の下に<sup>(4)</sup>は知非あり。

場合同じ。×にて示す。

(5) 非、1は悲、2は非の下に心あり。

(6) 照、1は昭。

(7) 似、正しくは以を可とす。

(6) 過の下に、4は一切あり。

(7) 限、4は根。

(8) 又、4になし。以下同じ、×。

(9) 説、人、4は不明。

(10) 知者何也、4は破れて不明。

(11) 覺知非、4は破れて不明。

(12) 聖境界以下八字、4は破れて不明。

(13) 也、4は故。

(14) 有凡、4は確かならず。

(15) 有、寂、4は破れて不明。

(16) 監、4は鑒。

(17) 照、4になし。

(18) 所知、4になし。

〔四〕

一、緣門起問曰、道究竟屬誰。<sup>(11)</sup> 答曰、

究竟無所屬、如空無所依。道若有

繫屬、即有遮有開、有主有宰也。<sup>(12)</sup>

二、問曰、云何為道本、云何為法用。

答曰、虛空為道本、參羅為法用也。

於是緣門復起問曰、道究竟屬誰。<sup>(11)</sup>

答曰、究竟無所屬、如空無所依。<sup>(12)</sup>

道有所繫屬者、即有遮有開、有主

有宰。<sup>(13)</sup>

又問曰、云何為道本、云何為法用。<sup>(14)</sup>

又問、道究竟屬誰。答、究竟無所

屬、如空無所依。道所屬者、即有

遮有礙、有主有寄。

又問、云何為道本、云何為法用。

答、虛空為道本、參羅為法用。又



三、問曰、於中誰為造作。答曰、中実無造作。法界性自然。<sup>(3)</sup>

四、問曰、可不是衆生業力所為耶。答

曰、夫受業者、而為業繫所纏。自因無由。何假鑿海墳山、安天置<sup>(4)</sup>。

五、問曰、蓋聞菩薩有意生身。豈不由神通之力耶。答曰、凡夫有漏之業、

聖人無漏之業。彼雖勝劣有殊、由來是自然之道。故云、種種意生身、我說為心量。

六、問曰、既言空為道本、空是仏不。

答曰、如是。

七、問曰、若空是聖人、何不遣衆生念

空、而令念仏也。答曰、愚癡衆生教令念仏。若有道心之士、即令觀身実相、觀仏亦然。夫言相者、即<sup>(5)</sup>

答曰、虚空為道本、參羅為法用。

又問曰、於中誰為造作者。答曰、<sup>(7)</sup>

中実無造作者、法界性自然。<sup>(9)</sup>

又問曰、不可不是衆生業力所為耶。<sup>(11)</sup>

答曰、夫受業者、而為業繫所纏、

自因無由、何假鑿海墳山、委天置<sup>(12)</sup>

地。<sup>(13)</sup>

又問曰、蓋聞菩薩有意生身、豈有<sup>(14)</sup>

神通之力耶。答曰、凡夫有有漏之

業、聖人有無漏之業、彼雖勝劣有<sup>(15)</sup>

殊、由未是自然之道。故經云、種<sup>(16)</sup>

々意生身、我說為心量。<sup>(17)</sup>

又問曰、既言空為道本者、空是仏<sup>(18)</sup>

不。答曰、如是。

又問曰、若空是者、聖人何不令衆<sup>(19)</sup>

生念空、而令念仏。答曰、為愚癡

問、於中誰為造化。答、於中実無造化者、法界性自爾。

又問、可不是衆生業力所為耶。答、

凡夫受業者、而為業繫所纏、自因<sup>(11)</sup>

無耶。何假鑿海墳山安天置地。

又問、蓋聞聖有意生身、豈不由神

道之耶。答、凡夫有漏之業、聖人<sup>(12)</sup>

無漏之業。彼雖勝劣有殊、由未是

自体之道。故經言、種々意生身、

我說為心量。

又問、既言為道本者是以不。答、

如是。

又問、若空是者、何不遣人念空、<sup>(18)</sup>

而念仏。答、為愚人教念仏。若有

道心者、教念空亦得。即令觀身実<sup>(19)</sup>

相、觀仏亦然。実相者、即是空無

是空無相也。<sup>(10)</sup>

- (1) 究、<sup>(2)</sup>になし。
- (2) 也、<sup>(2)</sup>になし。
- (3) 然の下に<sup>(2)</sup>は也あり。
- (4) 因、<sup>(2)</sup>は因。
- (5) 置の下に、<sup>(2)</sup>は地あり。
- (6) 豈、原本不明、<sup>(2)</sup>による。
- (7) 若空、<sup>(2)</sup>は空若。
- (8) 令、<sup>(2)</sup>は令字をダブル。
- (9) 言の下に、<sup>(2)</sup>は実あり。
- (10) 空、<sup>(2)</sup>は虚。

この段、第二、第三の問答を『注心賦』第三に融大師の言葉として引く。同書に別に『絶観論』の句とするもの、および『宗鏡録』第九十八に引くものと関連あり。

衆生、教令念仏。若有道心之士、<sup>(2)</sup>  
即令觀身実相、觀仏亦然。夫言実相者、即是空無相也。<sup>(2)</sup>

- (1) 於、<sup>(4)</sup>は如。
- (2) 究、<sup>(4)</sup>になし。
- (3) 属、<sup>(4)</sup>は処。
- (4) 有所繫属者の五字、<sup>(4)</sup>は破れて不明。
- (5) 又、<sup>(4)</sup>になし。以下同じ、×。
- (6) 本云何以下八字、<sup>(4)</sup>は破れて不明。
- (7) 曰、<sup>(4)</sup>になし。
- (8) 作、<sup>(4)</sup>は化、次も同じ。
- (9) 中の上に、<sup>(4)</sup>は於あり。
- (10) 然、<sup>(4)</sup>は余。
- (11) 不、<sup>(4)</sup>になし。
- (12) 委、<sup>(4)</sup>は安。
- (13) 地の次に、<sup>(4)</sup>は、問曰、於中誰為造作者、答曰、<sup>(4)</sup>無造作者、法界性自然の二十二字あり、前の問答と重複す。

相也。

- (1) 海以下、<sup>(6)</sup>に傍線部分を存し、他は破損のため確かならず。
- (2) 而、<sup>(6)</sup>は如。
- (3) 得、<sup>(6)</sup>は破損して不明。

〔五〕

一、緣門起問曰、蓋聞外道亦得五通、<sup>(1)</sup>

菩薩亦得。共彼有何異也。入理答曰、不同。何以故、外道謂有能得、即不爾、了達無我故也。

二、問曰、自有始、凡初學入理未門、<sup>(3)</sup>

微証真如、薄知妙理。与彼外道五通、何者勝。答曰、先取入理微証、何用彼達事五通乎也。<sup>(4)</sup>

絶觀論の本文研究（柳田）

(14) 曰、聞、[4]は確かならず。

(15) 有、[4]は不由。

(16) 之業、[4]は破れて不明。

(17) 経、[4]になし。

(18) 生、[4]は破れて不明。

(19) 者、[4]は道本。

(20) 土の下に、[4]は念空亦得の四字あり。

(21) 言、[4]は確かならず。

於是緣門復起問曰、蓋聞外道亦得

五通、菩薩亦得、彼何有異也。<sup>(1)</sup>

理答曰、不同。何以故、彼外道謂有能得者、<sup>(3)</sup>菩薩即不爾、了達無我故。

又問曰、自有始、凡初學入理未門、<sup>(4)</sup>

微証真如、薄知妙理。与彼外道五通、何者勝也。<sup>(5)</sup>答曰、先取入理微

三、問曰、若得五通者、交為世所尊、  
 交為世所重、前未知然、却知過事、  
 自防愆犯、豈不勝哉。答曰、不然。  
 何以故、一切世人、心多著相、貪  
 緣事業、<sup>(6)</sup> 僞亂真。彼雖有勝意之  
 通、善星之弁、若不知実相之理、  
 皆不免沒於裂地之患。<sup>(6)</sup>

- (1) 問曰蓋の三字、原本は不明。  
 [2] による。  
 (2) 外道謂の三字、原本は不明。  
 (3) 微、[2] になし。  
 (4) 乎、[2] になし。  
 (5) 知、原本は破損して不明。  
 (6) 裂地之患、[1] は破損。[2] は患の  
 下に也あり。

証者、何用彼彼道事五通。<sup>(6)(7)</sup>  
 又問曰、若得五通者、交為世所尊、  
 交為世所重、前知未然、却知過事、  
 自防愆犯、豈不勝哉。答曰、不然。  
 何以故、一切世人心多著相、貪緣  
 事業、<sup>(8)</sup> 僞亂真。彼雖有勝意之通、  
 善星之辯、<sup>(9)</sup> 若不知実相之理者、皆  
 不免沒魂於裂地之患。<sup>(10)</sup>

- (1) 何有異也、[4] は有何異。  
 (2) 彼、[4] になし。  
 (3) 得者、[4] は我心故とす。  
 (4) 又、[4] になし。以下同じ、×。  
 (5) 者、也、[4] になし。  
 (6) 彼、[4] になし。  
 (7) 道、[4] は迷。  
 (8) 通の下に、[4] は乎あり。  
 (9) 若、者、[4] になし。  
 (10) 未、[4] は亦。  
 (11) 却、[4] になし。

〔六〕

一、緣門問曰、道者為独在於形靈之中耶、亦在於草木之中耶。<sup>(1)</sup>入理曰、<sup>(2)</sup>道無所不遍也。

二、問曰、道若遍者、何故煞人有罪、煞草木無罪。答曰、夫言罪不罪、皆是就情約事、非正道也。<sup>(3)</sup>但為罪人不達道理、妄立我身、煞即有心、心結於業、即云有罪。草木無情、本来合道、理無我故煞不計、即不論罪与非罪。<sup>(4)</sup>凡夫無我合道者、視

- (12) 不、[4]は確かならず。  
 (13) 世の下に、[4]は間あり。  
 (14) 相、[4]は想。  
 (15) 辯、[4]は弁。  
 (16) 免、原本は勉、[4]による。

於是緣門復起問曰、道者為独在於形靈之中耶、亦在於草木之中取。<sup>(1)</sup>入理答曰、道無所不遍。<sup>(2)</sup>

又問曰、若道遍者、何故煞人有罪、煞草木無辜。<sup>(3)</sup>答曰、夫言罪者、皆是就情約事、非正道也。<sup>(4)</sup>但為人達理妄立我身、煞即有心、心結於業、即云罪也。<sup>(5)</sup>草木無情、本来合道、理無我故、煞者不計、即不論罪与非罪。<sup>(6)</sup>夫無我合道者、視形如

又問、大道者、為独在形路之中耶、亦在草木之内耶。答、大道無所不遍。

又問、道若遍者、何故煞人有罪、煞草木無辜。答、夫言有罪無罪者、皆就情約事、非正道也。<sup>(1)</sup>但為人達理、妄云為我身、煞即有心、結於業、即云罪也。<sup>(2)</sup>草木無罪情故、非有我故、煞者不計、即不論罪与無罪。夫無我者、視形如草木、被

形如草木、被斫如樹林。<sup>(6)</sup>故文殊執劍於瞿曇、鵞掘持刀於釈氏。此皆<sup>(7)</sup>道合同証不生、了知幻化虛無。故即不論罪与非罪。<sup>(9)</sup>

三、問曰、若草木久来合道、經中何故不記草木成仏、偏記人也。答曰、非独記人、亦記草木。經云、一微塵中俱含一切法、亦如也、一切衆生亦如也、如無二無差別。<sup>(10)</sup>

- (1) 於、<sup>(2)</sup>になし。
- (2) 入理以下の五字、原本は不明。<sup>(2)</sup>による。
- (3) 罪、<sup>(2)</sup>は世。
- (4) 凡、<sup>(2)</sup>になし。
- (5) 無、<sup>(1)</sup>は不明、<sup>(2)</sup>による。
- (6) 樹、兩本とも確かならず。
- (7) 皆以下の五字、原本は不明、<sup>(2)</sup>

草木、被斫如樹林。<sup>(13)</sup>故文殊執劍於瞿曇、鵞掘持刀於釈氏、此皆合道、同度不滅也。<sup>(14)</sup>不生了知、幻化虛無、故即不論罪与非罪。<sup>(15)</sup>

又問曰、若木亦合道者、經中何故不記草木成仏、乃偏記人也。答曰、<sup>(16)</sup>非独記人、草木亦記。經云、於一微塵中、具含一切法。又云、一切亦如也。一切衆生亦如也。如无二无差別也。<sup>(20)</sup>

- (1) 靈、<sup>(4)</sup>は器。
- (2) 在、<sup>(4)</sup>になし。
- (3) 中取、<sup>(4)</sup>は内耶。
- (4) 入理、<sup>(4)</sup>になし。
- (5) 道の上に、<sup>(4)</sup>は大あり。
- (6) 曰、<sup>(4)</sup>になし。以下同じ、×
- (7) 若道、<sup>(4)</sup>は道若。
- (8) 辜、<sup>(4)</sup>は罪。

斫如樹林。故文殊執劍於瞿曇、鵞掘持刀於釈氏。此皆合道、同証無生、了知幻化虛故、即不論罪与非罪。又問、若草木亦合道者、經中何不記草木成仏、但偏説人也。答、<sup>(3)</sup>非独説人、草木亦説。<sup>(4)</sup>故經云、一微塵中具含一切法。又云、一切法亦如也、一切衆生亦如也、如即無差別。

- (1) 遍、<sup>(6)</sup>は廬。
- (2) 為、<sup>(6)</sup>になし。
- (3) 偏、<sup>(6)</sup>は論。
- (4) 説、<sup>(6)</sup>は記、次も同じ。

による。

(8) 不の下に、[2]は減不の二字あり。

(9) 非、[2]は不。

(10) 中俱の二字、[1]は不明、[2]による。

(11) 如無二無の四字、[1]は不明、[2]による。

(9) 情、[4]は法。

(10) 理の下に、[4]は者あり。

(11) 木の下に、[4]は水あり。

(12) 我の下に、[4]は哉あり、次も同じ。×

(13) 被、[4]は破。

(14) 同度不滅也、[4]は用証とす。

(15) 不、[4]は無。

(16) 又、[4]になし。

(17) 若の下に、[4]は草あり。

(18) 亦、[4]は久来。

(19) 一、[4]になし。

(20) 切の下に、[4]は法あり。

(21) 也、[4]になし。

## 〔七〕

一、緣門問曰、如是畢竟空理、當於何証。<sup>(1)</sup>入理曰、當於一切色中求、當於自語中証。

二、問曰、云何當於一切色中求、當於<sup>(2)</sup>

於是緣門復起問曰、如是畢竟空理、

當於何求、當於何証。入理答曰、

當於一切色中求、當於自語中証。<sup>(1)</sup>

又問曰、云何色中求空、語中求証。<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup><sup>(4)</sup><sup>(5)</sup><sup>(6)</sup>

又問、如是畢竟空理、當於何求、

當於何証。答、當於一切色中求、

當於汝自語中証。

又問、云何色中求、語中証。答、

自語中証。云何色中求、云何空語中証。答曰、空色一合、語証不二也。

三、問曰、若一切法空、何為聖通凡擁。

答、妄動故擁、真靜故通。

四、問曰、既実空者、何為受薰。若既

受薰、豈成空也。答曰、夫言妄者、

不覺忽而起、不覺忽而言。其実空

体中、無有一而受薰。

五、問曰、若実空者、一切衆生、即不

修道。何以故、自然性是故。答曰、

一切衆生、若解空理、実亦不仮修

道。只為於空不空、生於有感。

六、問曰、若此者、応離惑有道。云何

言一切非道。答曰、不然。非惑即

是道、非離惑是道。何以故、如人

答曰、空<sup>(7)</sup>一合、語証不二。

又問曰、若一切法空者、何為有聖<sup>(8)</sup>

通凡擁。答曰、妄動<sup>(9)</sup>故擁、真淨<sup>(10)</sup>故

通。

又問曰、既実空者、何為受薰<sup>(11)</sup>。若

既受薰、豈成空也。答曰、夫言妄<sup>(12)</sup>

者、不覺忽而起。不覺忽而言、其<sup>(14)</sup>

実空中体、無有一法而受薰者<sup>(15)</sup>。

又問曰、若実空者、一切衆生即不<sup>(16)</sup>

脩道。何以故、自然性是故。答曰、

一切衆生、若解空理者、実不仮脩

道、只為於空不空生於有感<sup>(18)</sup>。

又問曰、若如此者、応離惑有道<sup>(17)</sup>。

云何言一切非道。答曰、不然、非<sup>(19)</sup>

惑<sup>(20)</sup>即是道、非離惑是道。何以故、

如人醉時非醒、醒時非醉。然不離

空色一合、語証不二。

又問、若一切法空者、何故聖通<sup>(1)</sup>凡

擁。答、妄動故擁、真淨故通。

又問、曉実空者、何為受動。若既

受動、豈成空也。答、夫言妄者、

不覺起受動、論其空体、無有一法

而受者。

又問、若実空者、一切衆生不須修

道、応自成。答、一切衆生若解空

理者、実不仮修道。只為不空、自

生有感。

(1) 通、[6]は道。



醉時非醒時、醒時非醉。<sup>(8)</sup> 然不離醉有醒、亦非醉即是醒也。<sup>(9)</sup>

七、問曰、若人醒時、致醉何在。答曰、如手番覆。若手番時、不応更問手何在。<sup>(10)</sup>

(1) 当於の二字、<sup>(1)</sup>は不明、<sup>(2)</sup>による。

(2) 於の下に、<sup>(2)</sup>は求当の二字あり。  
(3) 既実の二字、<sup>(1)</sup>は不明。<sup>(2)</sup>による。

(4) 体中、<sup>(2)</sup>は中体。この場合は体を下句につけて訓む。

(5) 若の下に、<sup>(2)</sup>は実あり。

(6) 実、<sup>(2)</sup>になし。

(7) 応離惑の三字、<sup>(1)</sup>は不明、<sup>(2)</sup>による。

(8) 時醒、<sup>(2)</sup>になし。

(9) 時非、<sup>(2)</sup>は非時。

(10) 即、<sup>(2)</sup>になし。

(11) 也、<sup>(2)</sup>になし。

絶観論の本文研究(柳田)

醉有醒、亦非醉即是醒。<sup>(20)</sup>

又問曰、若人醒時、致醉何在。答曰、如手翻時、不応更問覆手何在。<sup>(21)</sup>

(1) 又、<sup>(4)</sup>になし。以下同じ、×。

(2) 何の下に、<sup>(4)</sup>は当於一切の四字あり。

(3) 空、<sup>(4)</sup>になし。

(4) 語の上に、<sup>(4)</sup>は、当於自の三字あり。

(5) 求、<sup>(4)</sup>になし。

(6) 証の次に、<sup>(4)</sup>は、問曰、云何当於一切色中求、当於自語中証の十七字あり、重複す。

(7) 空の下に、<sup>(4)</sup>は色あり。

(8) 有、<sup>(4)</sup>になし。

(9) 動、<sup>(4)</sup>は動。

(10) 淨、<sup>(4)</sup>は靜。

(11) 薰、<sup>(4)</sup>は薰、以下同じ。×

(12) 若既受薰、<sup>(4)</sup>になし。

(13) 曰、<sup>(4)</sup>になし。

⑫問の下に、②は覆あり。

〔八〕

一、緣門問曰、若人不達此理、得説化生不。入理曰、不得。何以故、自眼未明、焉治他目。

二、問曰、隨其智力、方便化之。豈不得耶。答曰、若達道理者、可名智力。若不達道理、名為無明力。何以故、助已煩惱、作氣力故也。

三、問曰、雖然如理化人、且教衆行十

- ⑭覺の下に、④は不知あり。  
⑮受、④は有。  
⑯惑、④は或、以下同じ×。  
⑰如、④になし。  
⑱然、④は然。  
⑲離の下に、④は即あり。  
⑳非醉即是、④は不離とす。  
㉑翻の次に、④は覆、若手翻の四字あり。

於是緣門復起問曰、若人不達此理者、得説化衆生不。入理答曰、不得。何以故、自眼未開、焉能他目。  
又問曰、隨其智力、方便化之、豈不得也。答曰、若達道理者、可名智力。若不達理者、名為無明力。何以故、助已煩惱、作起力故。  
又問曰、不能以理導達人、且教衆

又問、若人不達此理者、得説法化衆生不。答、自眼未開、豈能療他目也。  
又問、隨其智力、方便化之、可不得也。若道理者、不達故名無明力也。何以故、助已煩惱作氣力故。  
又問、雖不能以入道、且教衆生行五戒十善、安處人天。豈不益哉。

善五戒、安処人天。豈不益哉。答曰、至理無益、更招二損。何以故、自陷陷他故。自陷者、所謂自妨於道。陷他者、所謂不免輪迴六趣也。問曰、聖人豈不說五乘有差別耶。答曰、聖人無心說差別法、但彼衆生自心怖望現。故經云、若彼心滅盡、無乘及乘者。我說為一乘也。

- (1) 不、[2]は有。
- (2) 説の下に、[2]は法あり。
- (3) 化の下に、[2]は衆あり。
- (4) 衆の下に、[2]は生あり。
- (5) 所謂不免の四字、[1]は確かならず、[2]による。
- (6) 也、[2]になし。
- (7) 怖、[2]は怖。
- (8) 現の下に、[2]は故あり。
- (9) 滅以下の六字、原本は不明。[2]による。

絶観論の本文研究（柳田）

生行十善五戒、安処人天、豈不益哉。答曰、理至理無益、更招二損。何以故、自陷者、所謂自妨於道。陷他者、所謂不免輪迴。又問曰、聖人豈不說五乘又差別耶。答曰、聖人無心說差別法、但彼衆生自心怖望現。故經云、若彼心滅盡、無乘及乘者。

- (1) 於、[4]は如。
- (2) 開、[4]は明。
- (3) 能、[4]は治。
- (4) 又、[4]になし。以下同じ、×。
- (5) 豈、[4]になし。
- (6) 作、[4]になし。
- (7) 起、[4]は氣。
- (8) 不の上に、[4]は雖あり。
- (9) 以理導遵、[4]は如是化とす。
- (10) 益の下に、[4]は善あり。
- (11) 理、[4]になし。

答、至理無益、更招二損。何以故、自陷陷他故、不免生死輪迴。自陷者、自妨於道。陷他者、不免生死輪迴。

又問、聖人豈不說三乘差別耶。答、聖人無心說差別法。但彼衆生自心希望見。故經云、若彼心滅盡、無乘及不乘者、無有乘建立也。

- (1) 若、[6]は言。
- (2) 不免以下六字、[6]になし。
- (3) 彼、[6]は教。

(12) 目の前に、[4]は自陷陷他故の五字あり。

(13) 免、[3]は勉、また免の下に、[4]は受あり。

(14) 転、[4]は輪。

(15) 廻の下に、[4]は六趣あり。

(16) 又、[4]は有。

(17) 故の上に、[4]は故あり。

(18) 者の次に、[4]は我説為一乗の五字あり。

〔九〕

一、緣門問曰、何有真學道人、不為他所知、不為他所識。<sup>(1)</sup>何為也。答曰、奇珍非為貧窮之所識、真人非為群邪偽人之所知。<sup>(2)</sup>

二、問曰、世有為人、不閑正理、外現威儀、專精事業、多為男女親近者何也。答曰、如姪女招群男、鼻穴來衆蠅。此為名相之所致也。<sup>(4)</sup>

於是緣門復起問曰、何為有真學道人<sup>(3)</sup>不為他所知、不為他所識、何為也。<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup><sup>(6)</sup>答曰、如奇珍非為貧窮之所識、真人非羣偽之所知。<sup>(7)</sup>

又問曰、世有為人、不閑正理、外現威儀、專精事業、多為男女親近者何也。答曰、如姪女招羣男、鼻穴來衆蠅。此為名相之所。<sup>(8)</sup><sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>

又問、世人外現威儀、專事精業、多為男女之所親近者何。答、姪女招羣男、鼻穴來衆蠅、此為名相之所致也。

- (1) 所、以下四字、<sup>①</sup>は確かならず、<sup>②</sup>による。  
 (2) 真の下に、<sup>②</sup>は真あり。  
 (3) 精事業、<sup>①</sup>は確かならず、<sup>②</sup>による。  
 (4) 也、<sup>②</sup>になし。

- (1) 有の下に、<sup>④</sup>は為あり。  
 (2) 道の上に、<sup>④</sup>は是あり。  
 (3) 人不、<sup>④</sup>になし。  
 (4) 他の下に、<sup>④</sup>は之あり。  
 (5) 他の下に、<sup>④</sup>は所あり。  
 (6) 識の下に、<sup>④</sup>は者あり。  
 (7) 又、<sup>④</sup>になし。  
 (8) 関、<sup>④</sup>は関。  
 (9) 日、<sup>④</sup>になし。  
 (10) 所、<sup>④</sup>は数。

[10]

一、緣門問曰、云何菩薩行非於道、為通達仏道。善惡無分別也。

二、問曰、何謂無分別。答曰、於法不生心也。

三、問曰、可無作乎。答曰、非有非作者也。

四、問曰、不覺知乎。答曰、雖知無我

絶観論の本文研究(柳田)

於是緣門復起問曰、云何菩薩行於非道、通達仏道。答曰、善惡無分別。  
 又問曰、何謂無分別。<sup>(2)</sup>答曰、於法不生心。  
 又問曰、可無作者乎。<sup>x</sup>答曰、非有無作者。

又問、云何行非道、通達仏道。<sup>(1)</sup>答、平等無分別。  
 又問、何為無分別。答、於法不生心。  
 又問、不可作、無作者受乎。答、人法性離、誰作誰受。  
 又問、雖非有無、可不覺知。<sup>(2)</sup>答、

也。

五、問曰、無我何有知。答曰、知亦自<sup>(1)</sup>無性。<sup>(2)</sup>

六、問曰、道我有何妨。答曰、知名亦不妨。

只恐心中有事。

七、問曰、有事有何妨。答曰、無妨即無事。無事問何妨。

無事。

八、問曰、若簡有事取無事者、云何名行非道耶。答曰、其實無事、汝強遣他生、作何物。

遣他生、作何物。

九、問曰、巨有因緣得煞生不。答曰、夜火燒山、猛風折樹、崩崖庄獸、汎水漂虫。心同如此、合人亦煞。

若有猶預之心、見生見煞、中有不盡、乃至蟻子亦繫你命也。

二、問曰、巨有因緣得偷盜不。答曰、

又問曰、可不覺知乎。答曰、雖知無我也。

又問曰、無我何有知。答曰、知亦自無情。

又問曰、道我有何妨。答曰、知名亦不妨、只恐中有事。

又問曰、有事有何妨。答曰、無妨即無事、無事問何妨。

又問曰、若簡有事取無、又云何名行非道耶。答曰、其實無事、汝強死見他生事作何物。

又問曰、巨有因緣、得煞生不。答曰、野火燒山、猛風折樹、崩崖庄獸、汎水漂虫。心同如此、合人亦併儻得、若有猶予、見生見煞、中有心不盡者、乃至煞蟻子亦結于命。

雖知、不立我。豈得無知。

又問、既無有我、何得有知。答、我是非我、非我有知。

又問、道我者有何妨。答、知是我亦不妨道我、只恐中有事。

又問、若簡有事取無事者、云何言得非道也。答、其實死事、汝侄死、遣他生事、作何物也。

又問、巨有因緣、得煞生不。答、野火燒山、猛風折樹、崩崖庄獸、汎水漂虫、心同如此、亦須併儻却。

若不心猶預、見有煞生、中心不盡者、乃至蟻子亦結汝命業。

又問、巨有因緣得偷盜。答、蜂采池花、雀銜庭粟、牛食汎豆、馬噉原禾、畢竟不作自他物解者得。若

蜂採池花蓮、雀銜庭粟、牛食汙豆、馬噉原禾。畢竟不作他解、合山岳亦擎取得。若不如此、乃至針縷葉、亦繫你項作奴婢。

二、問曰、巨有因緣得行姪不。答曰、天覆於地、陽合於陰、廁承上漏、泉澍於溝。心同如此、一切行處無鄣導。若情分別、乃至自家婦亦汚見你也。

三、問曰、巨有因緣得妄語否。答曰、語而無主、言而無心、声同鐘響、柔氣類風香。心同如此、仏道亦是無。若不如此、乃至称仏、亦是妄語。

(1) 亦の下に、①は亦あり。

絶観論の本文研究 (柳田)

業。  
又問曰、巨有因緣、得偷道不。答曰、蜂採池蓮、雀銜庭系、牛食汙豆、馬噉原禾。畢竟不作他物解者、合山岳亦驚取得、若不如此者、乃至針縷縹葉、亦繫你項作奴婢。  
又問曰、巨有因緣行姪不。答曰、天覆於地、陽合於陰、廁承上漏、泉澍於溝。心同如此、一切無障礙。若生情分別者、乃至自家婦亦汚你心。  
又問曰、巨有因緣得妄語不。答曰、語而無主、言而無心、声同鐘響、氣類風音。心同如此、道仏亦是無事。若不如此者、乃至称仏亦妄語。

(1) 又、④になし。以下同じ、×。

生彼我心、乃至針豪、亦計作奴婢業。  
又問、得行姪不。答、天覆於地、陽合於陰。心同如此者、一切無導。若生情分別、自家婦亦汚汝心。  
又問、得妄語不。答、語而無生、言而無心、声同鐘響、氣類風陰、心同此者、罵仏無辜。若不如此、乃至念仏、亦墮妄語。

(1) 行の下に、⑥は於あり。

- (2) 自無、[2]は無自。
- (3) 名、[2]になし。
- (4) 汎水、[1]は確かならず、[2]による。
- (5) 中以下四字、[1]は不明、[2]による。
- (6) 曰、[2]になし。
- (7) 雀以下の五字、[1]は不明、[2]による。
- (8) 若不以下の七字、[1]は不明、[2]による。
- (9) 縷の下に[2]は草あり。
- (10) 婢の下に、[2]は也あり。
- (11) 於地以下の六字、[1]は不明、[2]による。
- (12) 情の下に、[2]は生あり。
- (13) 分別以下三字、[1]は不明、[2]による。
- (14) 否、[2]は不。
- (15) 柔、[2]になし。
- (16) 香、[2]は音。
- (17) 語の下に、[2]は也あり。

- (2) 謂、[4]は為。
- (3) 何有、[4]は有何。
- (4) 情、[4]は性。
- (5) 名、[4]になし。
- (6) 恐の下に、[4]は無心あり。
- (7) 事の下に、[4]は事あり。
- (8) 無の下に、[4]は者あり。
- (9) 又、[4]になし。
- (10) 死見、[4]は遣。
- (11) 勿、[4]は物。
- (12) 合、[4]になし。
- (13) 有、[4]になし。
- (14) 見、[4]になし。
- (15) 煞、[4]になし。
- (16) 于、[4]は乎。
- (17) 道、[4]は盜。
- (18) 曰、[4]になし。以下同じ、×。
- (19) 系、[4]は粟。
- (20) 原、[4]は蘭。
- (21) 驚、[4]は擎。
- (22) 錐、[4]は鋒。
- (23) 縦、[4]になし。24葉、[4]は葉。

- (2) 雖、[6]になし。
- (3) 我の下に、[6]は見あり。
- (4) 我、[6]になし。
- (5) 侄、[6]は強。
- (6) 不、[6]は有。
- (7) 預、[6]は豫。
- (8) 盡、[6]は蓋。
- (9) 者の下に、[6]は即あり。



〔一〕

一、緣門起問曰、若不存身見、云何行住坐臥也。答曰、但行住坐臥休。何須立身見。

二、問曰、既不存者、得思惟義理否。<sup>(1)</sup>

答曰、若計有心、不思惟亦有。若了無心、設思惟亦無。何以故、譬如禪師淨坐而興慮、猛風亂動而無

絶觀論の本文研究（柳田）

25) 亦、[4]になし。

26) 項、[4]は須。

27) 縁の下に[4]は得あり。

28) 者、[4]になし。

29) 主、[4]は生。

30) 道仏、[4]は仏道。

31) 是、32) 事、[4]になし。

33) 不の下に、[4]は知あり。

34) 者、[4]になし。

35) 亦の下に、[4]は是あり。

於是緣門復起問曰、若不存身見、云何行住坐臥。答曰、但行住坐臥、何須六身見。<sup>(2)</sup>

又問曰、既不存心者、得思惟義理否。<sup>(3)</sup>

答曰、若計有心者、不思惟亦有。若了無心者、設思惟亦無。何以故、譬如禪師靜坐而興慮、猛風

又問、若不存身、云何行住坐臥耶。答、但行住坐臥、何須立身見耶。<sup>(1)</sup>

又問、既不能得存心、得思惟義理不。答、若計有心者、不思惟亦

有。若了無心者、設使思惟亦無。禪定動而恒靜、猛風動樹無心。

有。若了無心者、設使思惟亦無。禪定動而恒靜、猛風動樹無心。

心也。<sup>(3)</sup>

- (1) 否、<sup>(2)</sup>は不。
- (2) 興、<sup>(1)</sup>は不明、<sup>(2)</sup>による。
- (3) 也、<sup>(2)</sup>になし。

乱動而無心。

- (1) 若の下に、<sup>(4)</sup>は存あり。
- (2) 曰、<sup>(4)</sup>になし。以下同じ、×
- (3) 六、<sup>(4)</sup>は立。
- (4) 見の下に、<sup>(4)</sup>は耶あり。
- (5) 不の下に、<sup>(4)</sup>は能得あり。
- (6) 者、<sup>(4)</sup>になし、以下同じ。
- (7) 有の下に、<sup>(4)</sup>は心あり。
- (8) 無の下に、<sup>(4)</sup>は妨あり。
- (9) 静、<sup>(4)</sup>は浄。

- (1) 答以下六字、<sup>(6)</sup>は確かならず。
- (2) 不、<sup>(6)</sup>になし。

〔一一〕

一、緣門問曰、若有初学道人、忽遇因緣、他欲求害、云何対治而合道乎。答曰、一箇不須対治。何以故、可避避之、不可避任之、可忍忍之、不可忍哭之。

二、問曰、若哭、与他有我見人何別。答曰、如杵扣鐘、其声自然出也。

於是緣門復起問曰、若有初学道人、忽遇因緣、他欲求害、云何対治而合道乎。答曰、一箇不須対治。何以故、可避避之、不可避任之。可忍忍之、不可忍哭之。<sup>(1)</sup>又問曰、若哭者、与我有我見人何別。答曰、如杵扣鐘、其声自然出<sup>(2)</sup>

又問、学道人忽被人打、云何対治而合道乎。答、不可忍、而詠嘆之。<sup>(1)</sup>又問、若哭者、与有我見人何別。答、如杵扣鐘、其声自然出也。何必有我乎。汝若強捉心嚙齒口忍者、此乃存大と我也。又問、人哀哭中有情動、豈同鐘響。

何必即有我乎。汝若強死捉心、噉齒噤忍、此乃存大大我。<sup>(1)(2)</sup>

三、問曰、人之哀哭、中有情動。豈同鐘響。答曰、言同与不同者、但是

汝多事、妄想思量作是問。若無心分別者、道跡自然。<sup>(3)(4)(5)</sup>

四、問曰、吾聞聖人兵不傷、苦不枉、色不受、心不動。此何為也。答曰、

若了一切法即無義、声与不声、動与不動、俱合道理無妨尋。<sup>(6)(7)</sup>

(1) 汝若強死の四字、[1]は不明、[2]による。

(2) 我の下に、[2]はもあり。

(3) 問曰以下四十四字、[2]になし。

(4) 同者、原本は不明。

(5) 若、原本は不明。

(6) 動、此、[1]は不明、[2]による。

(7) 尋の下に、[2]はもあり。

絶観論の本文研究 (柳田)

也。何必即有我乎。汝若強死捉心、噉齒噤忍、此乃存大大我也。<sup>(4)(5)(6)</sup>

又問曰、人之哀哭中有情動、豈同鐘響也。答曰、言同与不同者、但是

汝多事、妄想思量作是門。若無心分別者、体道自然。<sup>(7)(8)(9)(10)</sup>

又問曰、聞聖人兵不傷、苦不哭、色不受、心不動、此何為也。<sup>(11)(12)(13)(14)(15)</sup>

答曰、若了一切法無我者、声与不声、動与不動、俱合理無妨礙。

(1) 又、[4]になし。以下同じ、×。

(2) 見の下に、[4]は、有我あり。

(3) 如、[4]は扣。(4) 即、[4]になし。

(5) 噤、[4]は口。(6) 大、[4]になし。

(7) 響、[4]は響。(8) 但、[4]は俱。

(9) 相、[4]は想。

(10) 門、[4]は問。

(11) 聞の上に、[4]は吾あり。

答、若言同与不同者、俱是汝心多事、妄想思量作語。若知妄想者、

跡道無為自然之也。

又問、聖人兵不傷、苦不哭、色不動、心不動、何為。<sup>(3)</sup>答、若了一切法無我者、声与不声、動与不動、俱合理也。

(1) 合の下に、[6]は打あり。  
(2) 嘆、[6]は哭。  
(3) 為、[6]は謂。

(12) 傷、苦、(14) は苦傷。

(13) 哭の下に、(14) は歎あり。

(14) 為、(14) は物。

(15) 也、(13) はここで擱筆している。

質問のみで終っているのは、明らかに後代の転写本であることを示す。

〔一三〕

一、緣門問曰、我見有学道人、不多專

精持戒、護威儀不勦慙、不化領衆、

騰騰任運者、何意也。答曰、欲亡

一切分別心、欲滅一切諸有見。<sup>(11)</sup>雖

以騰騰任運、而內行無間。

二、問曰、如此行者、乃更生他小兒之

見、云何言能滅見也。答曰、俱滅<sup>(12)</sup>

汝見、何慮他生。譬如魚脫深淵、

何慮捕者嫌爾。

於是緣門復起問曰、我見有学道人、

不多專精持戒、不護威儀、不勦慙、

不化衆生、騰騰任運者何意也。答

曰、欲亡一切分別心、欲滅一切諸

有見、雖似騰騰任運、而內行無間。

問曰、此行者乃更生他小兒之見、

云何言能滅見也。答曰、但滅汝見、

何慮他生。譬如魚脫深淵、何慮捕

者嫌爾。

又問、有学道人不專持戒、不護戒

威儀、不勤精進、不化衆生、騰騰

任運、妖如癡人、有何意耶。答、

蓋是滅見耶、雖外似騰騰、<sup>(11)</sup>內察恒

無有捨。

又問、此行者更生他小兒之見、云

何称言滅見耶。答、但滅已見、何

慮他生。譬如魚求脫深泉、<sup>(12)</sup>寧当更

慮耶。

三、問曰、若於此者、即是自益損他、<sup>(3)</sup>

何名大士。答曰、汝見若不生、彼<sup>(4)</sup>

即不生。汝今玄慮他生、乃是自生、

非他生也。內通大理、外現小儀、

於法何損。汝今強欲要他大老子、

作小兒戲。於理何益。

四、問曰、如是滅見大士、何人能識、

何人能知也。答曰、証者乃知、行<sup>(6)</sup>

者能識。

五、問曰、如此大士、亦能化生不。答<sup>(8)</sup>

曰、何有日月不照、灯举者不明。

六、問曰、作何方便。答曰、正真無方<sup>(9)</sup>

便。

七、問曰、若無方便、云何利益。答曰、<sup>(10)</sup>

物來而名、事至而応。無心計校、

有預算之心。<sup>(11)</sup>

問曰、若此即益已損他、何名大士。

答曰、汝見若不生、彼即不生。汝

今玄慮他生者、乃是自生、非他生

也。

又問曰、內通大理、外現小儀、於

法何損。答曰、汝今強欲要他大老

子作小兒戲、於理何益。

問曰、如是見大士、何人能知。答

曰、証者乃知、行者能滅。

問曰、如此大士、亦能化生不。答

曰、何有日月出不照、灯举不明。

問曰、作何方便。答曰、正真無方

便。

問曰、若無方便、云何利益。答曰、

物來而名、事至而応、無心計校、

有預算之縁。

又問、若此者即違自益不平、何名<sup>(3)</sup>

大士。答、言損益但有空名、生与

不生、汝心自執。今汝云慮他者、

乃是自生、非他生耶。

又問、若內通大理、外現小儀、自

他同物、於法何損。答、汝今強<sup>(4)</sup>

死要他大老子作小兒戲。於理何益。

答、証者乃知、悟者能釈。<sup>(5)</sup>又問、

如是滅見大士、何人能知。<sup>(7)</sup>

又問、如此滅見大士、亦能他生不。<sup>(8)</sup>

答、何有日出不照、灯举不明。

又問、作何方便、云何大利。答、

物來而名、事至而応、無心計校、

断絶衆縁、始成大利。

又問、經云、思惟方便、從何而生。

答、諸仏不生、但從心生、縁化万

八、問曰、我聞如來七日思惟、起乎方便、云何而言無有計校之心。答曰、諸仏境界、非思惟量覺觀所知。

九、問曰、仏豈妄語耶。答曰、眞實非虛妄。  
問曰、云何經說思惟、今言不思惟。答曰、諸仏不生、但彼心生。緣化万有、法本無名。

一〇、問曰、云何經說思惟、今言不思惟。答曰、諸仏不生、但彼心生。緣化万有、法本無名。

- (1) 諸、(2) は法。(2) 俱、(2) は但。  
(3) 自益、(2) になし。

(4) 答、(1) は以下の答語はすべて大文字となる。

(5) 彼即不生以下の五字、(1) は不明。  
(2) は確かならず。

(6) 何人以下五字、(2) は確かならず。

(7) 証者乃知以下八字、(2) は確かならず。

(8) 問曰以下二十四字、(2) は次の問答と前後す。

問曰、我聞如來七日思惟起乎方便、云何而言無計校之心。答曰、諸仏境界非思惟量覺觀所知。

問曰、仏豈妄語耶。答、眞實非虛妄。

問曰、云何經說思惟、今言不思惟。答曰、化門方便也。

問曰、諸仏方便從何而生。答、諸仏不生、但彼心生、緣化万有、法本無名。

(1) 外の下に、(6) は相あり。

(2) 泉、(6) は淵。

(3) 又問、(6) は答に誤る。

(4) 於、(6) になし。

(5) 答以下の九字、次の又問の答とすべし。

(6) 釈、(6) は識。

(7) 人、(6) になし。

(8) 他、(6) は化。

(9) 真、[2]は直。

(10) 問曰、[1]は不明、[2]による。

(11) 預の下に、[2]は作あり。

(12) 算の下に、[2]は計あり。

(13) 心、[1]は確かならず、[2]による。

(14) 乎、[2]は于。

(15) 仏、[2]は確かならず。

(16) 生但の二字、原本は不明。

〔一四〕

一、緣門問曰、我不知、云何名為仏、

云何名為道、云何名變化、云何名

常住。入理答曰、覺了無物謂之仏、

道彼一切謂之道。法界出生為變化、

究竟寂滅為常住。

二、問曰、云何名一切法悉是仏法。<sup>(11)</sup>答

曰、非法非非法、是一切仏法也。<sup>(12)</sup>

三、問曰、何名為法、何名非法、何名

於是緣門復起問曰、我不知云何名

為仏、云何名為道、云何名為變化、

云何名為常住。入理答曰、覺了無

物謂之仏、通彼一切謂之道、法界

出為變化、究竟寂滅為常住。

問曰、云何名一切法悉是仏法。答

曰、非法非非法、是一切仏法。

問曰、何名為法、何名為非法、何

又問、我不知云何為仏、何名為道、

何者變化、誰名常住。答、覺了無

物、謂之為仏、通達一切、名之為

道、法界出生、稱為變化、究竟寂

滅、故号常住。

又問、云何名一切法悉是仏法。答、

非法通一切法也。

又問、誰說誰証。答、此誰云何言

非法非法也。答曰、是法說名是名為非法。答曰、是法名是法、

非法名非法者非誰、云何言証。非名非法、是非非所量。故名非法

四、問曰、此說誰証、無誰何証。答曰、非非法。

無誰無說、即是正說。問曰、此說誰証。答曰、此說非誰、

五、問曰、何名邪說。答曰、計有說者。云何言証。

六、問曰、是誰之計、云何無計。答曰、問曰、無誰何說。問曰、無誰何說。<sup>(1)</sup>

計者但語、語中無語、計者亦無。答曰、無誰無說、即生正說。

七、問曰、若此說者、即一切衆生、本來解脫。答曰、尚無繫縛、何有解

脫人。問曰、計有說者、云何無計。答曰、計者但語、語中無語、計者

亦無。問曰、若此者、即一切衆本來解脫。

八、問曰、此法何名。答曰、尚無法。答曰、尚無繫縛者、何有解人。

何況有名。問曰、此法何名。答曰、尚無有法、

九、問曰、若此說者、我軀不解。答曰、問曰、此法何名。答曰、尚無有法、

實無解法、汝勿求解。何況有名。

二、問曰、云何究竟。答曰、無始終。<sup>(7)</sup>問曰、若此說者、我軀不解。答曰、

三、問曰、可無因果耶。答曰、無本即實無解法、汝勿求解。

証。

又問、無誰何說。答、無誰即無說、

無說之說乃稱正說。

又問、何名邪說。答、有心計校者、

名為邪說。

又問、是誰之計、云何無計。答、

計者悉空、其真無物、知語中無語、

計者亦無。

又問、如此說者、一切衆生、本解

脫。答、本無繫縛、何有解脫。

又問、縛解已無、何有名字。答、

法尚無有、何得有名。

又問、如此語者、我軀不解。答、

實無解法、莫求解。<sup>(1)</sup>汝若求一个解

法、此法令汝更受長睡。<sup>(2)</sup>

又問、何法名究竟。答、法無始終。



無末。

三、問曰、云何說証。答曰、真實無証說。

三、問曰、云何知見。答曰、知一切法如、見一切等。

四、問曰、何心之知、何目之見。答曰、無知之知、無見之見。

五、問曰、誰說是言。答曰、如法所問。

六、問曰、云何如我所問。答曰、自觀問。答曰亦不可知。

七、於是緣門再思再審、寂然無言也。

入理及問先生曰、汝何以不言。緣

問答曰、我不見一法如微塵許而可對說。

爾時入理先生、即語緣門曰、汝今似見真實理也。

問曰、云何至究竟。答曰、無始終。

問曰、可無因果耶。答曰、無本即無末。

問曰、云何說証。答曰、真實無証說。

問曰、仏云何知見。答曰、知一切法如、見一切法等。

問曰、何心之知、何目之見。答曰、無知之知、無見知見。

問、誰說是言。答曰、如汝所問。

問曰、云何如我所問。答曰、汝自觀身、問答亦可知。

於是緣門再思再審、寂然無言。於是入理反問弟子、汝何以不言。

緣門答曰、我不見一切法如微塵許而可對說。

爾時入理即語緣門曰、汝今似見真實好理也。

誰存究竟。

又問、法無究竟、可因果耶。答、法本既無、何名因果。

又問、云何說証。答、真實無証說。又問、仏云何知見。答、仏知一切法如、見一切法等。

又問、何心知、何目見。答、無心之心知、無目之目見。

又問、誰說是言。答、如我所問。

又問、云何如我所問。答、欲得知、汝自觀問者。

於是緣門再審、寂然無言。入理先生問曰、汝何不言。緣門答曰、我不見一切法如微塵許、而不对也。

爾時入理即語緣門曰、汝今似見真實好理也。

(1) 云何以下十字、[2]は不明。

(2) 非、[2]は確かならず。

(3) 仏、[2]になし。

(4) 説、[2]になし。

(5) 名、[2]になし。

(6) 語、[2]は之。

(7) 始終、[2]は終始。

(8) 答、[2]は問。

(9) 及、[2]は乃。

(10) 曰、[2]になし。

(11) 似、也、[1]は不明。

(12) 見の下に、[2]は少あり。

爾時入理先生即語緣門曰、汝今似見真実理也。

(1) 問曰以下の六字、重複。

(1) 莫の上に、[6]は汝あり。

(2) 个の下に、[6]は小あり。

(3) 如、[6]は等。

(4) 見以下の五字、[6]になし。

(5) 似、[6]は以。

〔一五〕

一、緣門問曰、云何似見、非正見乎。

入理答曰、汝今所見、無有一法、

如彼外道、雖学隱形、而未能滅影

亡跡。

二、緣門問曰、云何得形影俱變滅也。

緣門復問曰、云何見、非正理見乎。

入理答曰、汝今所見、無有一法者、

如彼外道、雖学隱形、而未能滅影

亡跡。

於是緣門問曰、云何得形影雙滅。

緣門問曰、云何似見、非正見乎。

入理答、汝今所見、無有一法者、

如彼外道雖得隱形、而未能滅影及

跡。

緣門又問、何得形影雙滅。入理答

入理答曰、本無心境、汝莫起生滅之見。

入理答曰、本無心境、汝莫起生滅之見。

三、問曰、凡夫所以問、聖人所以說。

問曰、凡夫所以問、聖人所以說。

答曰、有疑故問、為決疑故說也。

答曰、有疑故問、為決故說。

四、問曰、吾聞聖人無問而自說、何決也。

問曰、吾聞聖人無問而自說者、何決也。

是有法可說耶、為是玄見他疑耶。

為是有法可說耶、為是玄見他疑耶。

答曰、皆是对病施藥也、如天雷聲動、必有所應。

答曰、皆是对病施藥也。

五、問曰、大聖如來、即無有心生。緣何為現世。

問曰、他既未言、聖人玄說、其病未發、藥治何也。

答曰、夫太平之世、瑞草緣生。

答曰、如天雷聲動、必有所應。

六、問曰、如來既非命盡、云何現滅。

問曰、大聖如來既無心生、緣何現世。

答曰、飢荒之世、五穀緣滅也。

答曰、夫太平之年、瑞草緣生。

七、問曰、吾聞聖人哀從定起、悲化群生。

問曰、如來既非命盡、云何現滅。

無尋大通、豈同瑞草也。

答曰、飢荒之世、五穀緣滅。

法身、宝身四大空身也。分別前境

問曰、吾聞聖人哀從定起、悲化群生、無礙大通、豈同瑞草生也。

答曰、但以化身無

又問、云何言念。

答、不須說。此是对病語。

應起謂化身。法無因繫、化無緣留、出沒虛通、故曰無尋生也。

八、問曰、云何言悲。答曰、但以化身無慮、体合真空、仁物無心、彼強謂之悲。

九、問曰、衆生何時修道得似如來。答

曰、若不了、於恒沙劫修道、轉轉不及。初若了衆生当身即是如來、何論得似不似。

一〇、問曰、若如說者、如來即是易得。

云何言三大劫修。答曰、甚難也。

二、問曰、若不轉即身是、云何名難。

答曰、起心易、滅心難。是身易、非身難、有作易、無作難。故知功

難會、妙理難合。不動即真、三聖希及。

曰、定謂法身、報身四大六身是也。分別削境、應起謂化身、法無因繫、化無緣留、出沒虛通、故曰無礙也。

問曰、云何言悲。答曰、但以化身無慮、体合真空、仁物無心、彼強謂之悲也。

問曰、衆生何時脩學得似如來。答曰、

若不了者、於恒沙劫修道、轉轉不及。若了者、衆生当身即是如來、何論得似不似。

問曰、若如說者、如來即是易得。

云何言三大劫脩也。答曰、甚非易。

問曰、既道即身是、云何反說難。

答曰、起心心易、滅心心難、有作

身易、無身無作難、故知玄功難會、妙理難合、不動即真、三聖希及。

慮、体合真空、人物無心。彼強謂之悲也。

又問、衆生何時修道、得似如來。答、若不了時、縱設恒沙劫修、轉不及。若了時、衆生即是如來。何論得似。

又問、若此說者、如來即應易得、

云何言三代劫修耶。答、甚難非易。又問、既道即是、云何返說難。答、

夫起心二是易、滅二轉難。有作有

身易、無作無身難。故知玄功難會、

妙理難合。不動即真、無相為法、

即三聖共尊、非吾獨貴。

於是緣門長歎、声滿十方、寂然無音。豁然大悟、玄光淨智、乃蕩先疑、無始是非因茲永息。始知學道

三、於是緣門長歎曰、声滿十方、忽哭

無音、豁然大悟。<sup>(1)</sup>玄光淨智度、及

照無疑。始知學者奇難、徒興夢慮。<sup>(2)</sup>

而即高声歎曰、善哉善哉、如先生

說而說、我實無聞而聞。聞說一合、<sup>(3)</sup>

即寂寞無說。不知先生向來問答名

諱何法。

三、於是入理先生、身安不動、目擊無

言、顧視四方、呵呵唧唧、而謂緣

門曰、夫至理幽微、無有文字。汝

向來所問、皆是量起心生、夢謂多

端、覺已無物。汝欲流通於世、寄

問假名。請若收蹤。故名絕觀論也。

緣門論一卷。

□□□阿志澄闍梨各執一本

校勘訖

絶觀論の本文研究（柳田）

於是緣門長歎、声滿十方、寂然無

音、豁然大悟、玄淨智光、反蕩先

疑、無始是非、因茲永息。始知學

道奇難、徒興夢慮。而即高声歎曰、

善哉善哉。如先生無說而說、我實

無聞而聞、聞說一合、而寂寞無語、

不知先生向來問答名誰何法。

於是入理先生身安不動、自繫無言、

觀視四方、呵呵唧唧、而謂緣門曰、

夫至理幽微、無有文字。汝向來所

問、皆是量起心生。夢謂多端、覺

已無物。汝欲流通於世、寄問假名、

請若收蹤、故言絶觀論。

奇難也。先生則無說而說、我則無

聽而聽。說一合、從來寂然。不知

上來所問答者誰也。

於是入理曰、夫至理幽玄、無有文

字。汝所問者、皆是量起心生也。

學已無物皆假名、問答無蹤。可言

絶觀論也。

(1) 得、[6]になし。

(2) 人、[6]は之。

(3) 又、[6]は答。

(4) 即の下に、[6]は身あり。

(5) 無、[6]になし。

(6) 學、[6]は覺。

(7) 皆の下に、[6]は是あり。

- (1) 吾聞の二字、1は不明、2による。
- (2) 法身以下四字、1は不明、2による。但し、宝は1は報なるがごとし。
- (3) 以化身以下の五字、1は不明。
- (4) 即是、2になし。
- (5) 如来、2になし。
- (6) 劫修の二字、1は不明、2による。
- (7) 身、2は是。
- (8) 身、2になし。
- (9) 作の下に2は作あり。次も同じ。
- (10) 知、2は之。
- (11) 悟玄光の三字、1は不明、2による。
- (12) 始知、2は明かならず。
- (13) 徒興夢、2は明かならず。
- (14) 哉善哉、2は明かならず。
- (15) 説而、2は而説。
- (16) 一合即の三字、1は不明、2による。

17曰、2になし。

18以下約十五字は、1になく2のみにあり。

一、問曰、人皆作何方便得無生心。答、下中上修、能見自心妄、知三界如幻実空、始可得免。

問曰、人皆有心、作何方便得無生心。答、下中上修、能見自心妄想、知三界如幻実空、始可得免。

二、問曰、一切衆生如幻如夢、弟子煞之有罪不。答曰、若見衆生、煞之得罪、不見衆生是衆生即無可煞、如夢中煞人、寤時畢竟無物。

問曰、一切衆生如幻如夢、弟子煞之有罪不。答、若見有衆生是衆生、即之得罪。不見衆生是衆生、即無可煞、如夢中煞人、寤時畢竟無物。

三、問、云何入道。答、心非有無、何問入道、欲識入道者、不出入心是也。

問、云何入道。答、心非有無、何入道。<sup>(4)</sup>欲得識入道者、不出入心是也。

四、問、有人飲酒食肉行五欲、作仏法耶。答、心上不有、誰作是非。

問、有人飲食酒肉、行諸五欲、得作仏法耶。答、心上不有、誰作是

五、問、何名仏法。答、知心法無是仏法。

六、問、何名無分別知。答、現識不生、

覺不起是。

七、問、何名妄想。答、想念心是。

八、問、云何息妄想。答、知妄不生、

無妄可息、知心無心可息是也。

九、問、何名如來藏。答、覺知色塵是

自心現、想即不生、故即是如來藏。

一〇、問、世人修學得道不。答、修道實

行不可成、世人皆初時有心、久後

即慢。故曰實行者、不可說覆道也。

又云、兵悵不可擬敵、馬劣不能代

步。

二、問、云何無相法。答、心裏所求、

証無人我。說即假名、言即假相、

非。

問、何名仏法。答、知心法無、即

是仏法。

問、何名無分別智。答、現識不生、

覺觀不起是。

問、何名妄想。答、想念心是。

問、云何息妄想。答、知妄想不生、

無妄可息、知心無心可息是也。

問、何名如來藏。答、覺知色塵是

自心現、想即不生、不生故即是如

來藏。

問、世人修學得道不。答、修道實

行不可成。世人皆初時有心、久後

即慢、故曰實行者、不可口說而得

道也。又云、兵怯不可擬敵、馬劣

不能代步。



見聞知覺、有何名相。

三、問、作何行即生死色界。答、此人

不知方便、皆是息妄見、心雖得久

復還發。經云、當來比丘、如犬逐

塊不逐人、如師子逐人不逐塊、塊

自息。修道之人、若不了心、亦復

如是、更增生死。

三、問、仏誓度衆生盡、然後成仏、衆

生未度、仏已成仏。答、仏自有解、

譬如有客坐在於閤室。主人吹火、

意欲無照客、但火著時、主人先照。

菩薩意度衆生、然功德具足、在前

成仏。

四、問、衆生本法云何。答、無仏無衆

生、不見人我想、即是本法。譬如

鑛中雖有其金、若不施功、終不可

問、云何無名想法。答、心裏所求、

証無人我。說即假名、言即假相、

見聞知覺<sup>(6)</sup>有何名想。

問、作何行、即生無色界。答、此

人不知方法、皆是息妄見、心雖得

靜、久後還發。經云、當來比丘、

如犬逐塊、人已擲塊、犬知塊從人

起、犬咬塊不咬其人。若也咬人、

塊即自息。修道之人、若了心量、

亦復如是。

問、仏誓度衆生盡、然後成仏。衆

生未度、仏已成仏。答、仏自有解、

譬如有客坐在閤室、主人吹火意無

照客、但火著時主人先照。菩薩意

度衆生。然功德具足、在前成仏。

問、衆生本法如何。答、無仏無衆

得、用功之者、乃獲金矣。心亦如

是。雖知本來常寂、若不觀察、不得定也。是勸諸學者、一切時處、

恒向內照、物得捉之捨。若有人求

道、不習此法、千劫万劫枉功夫、

徒自疲勞、忍辛苦、究竟不免墮三

塗。譬如求蘓鑽搖、不致力尽不能

獲、寔由愚。智者求心、不求仏、

了本心源者即無余、亦如求蘓鑽乳

濃、不費其功、疾成蘓。

一五、問曰、諸仏聖人說青黃赤白觀法何

意。答曰、正約衆生使住、此是住

心法、亦合人識知所見皆不実。若

為知一切物上、或見青、或見黃、

即一切所見皆無実、如今人將放光

明作聖、大誤也。

生、不見人我想、即是本法。

(1)幻、[6]は効。

(2)生の下に、[6]は是衆生の三字あり。

(3)何の下に、[6]は問あり。

(4)道の下に、[6]は答心非有無の五字あり。

(5)問の上に、[6]は答あり。

(6)有、[6]は不。

一六、問曰、作觀亦知過去未來若為。答

曰、猶心靜知、縱使知亦是不實。

又問、仏得他智、如過去未來等事、亦可是不實。答曰、亦不是實。經云、菩薩無來去今。云何見過去未來等事、説仏見過去未來得他心智、是了經説。

一七、問曰、如來藏是衆生云何。答曰、

如來藏者、為見身是人、説有如來藏。若不自身者、即不説有如來藏。又問、如來藏量説始有若為。答曰、如人若見身実者、即説有父母所生。若不自見身、亦不得論父母、仏就衆生見実、即説如來藏。衆生根本皆如來藏造業、但造業即受報、説如來藏者、是不了教説。又知如來

藏是無我之異名、亦是盡義也。  
達摩和尚絕觀論一卷

辛巳年三月六日寫記僧法成

觀行法為有緣無名上士集。